

第35回 熊本大学附属図書館貴重資料展

# 熊本藩に生まれた近代

―手永・惣庄屋制と地域行政―

## 解説目録

期間 令和元年11月2日(土)～4日(月)

10時～17時

会場 熊本大学附属図書館 1階

古文書閲覧室・ラーニングコモンズ

近代地方自治制の歴史的基盤を明らかにする



古閑忠右衛門  
肖像画(個人蔵)

共催 熊本大学附属図書館・熊本大学永青文庫研究センター

協力 公益財団法人永青文庫

後援 熊本県教育委員会・熊本市教育委員会・熊本日日新聞社・NHK 熊本放送局・RKK・TKU・KKT・KAB



## 熊本藩に生まれた近代―手永・惣庄屋制と地域行政―

### はじめに

熊本藩の地方統治は、同時代からも後の時代からも、高い評価を受けていました。その理由は、①藩行政の仕組みや官僚制が高度に整備されていたこと、②百姓出身の惣庄屋そうじょうやを責任者とする「手永」てなが（地域行政機構）が、独自の吏員と財源をもち、耕地開発・災害復旧・社会救済などの広範な行政活動を展開したことにあります。本書では後者に力点を置き、近代地方自治制の重要な前提となった手永・惣庄屋制の実態を明らかにします。熊本地震後の文化財レスキュー事業で救出された惣庄屋文書（古閑家文書）も初公開します。

二〇一九年十月

熊本大学永青文庫研究センター 今村直樹

#### 同時開催 公開講演会・第14回永青文庫セミナー

演題

熊本藩政と手永・惣庄屋制―近代地方自治の胎動―

講師

今村直樹（熊本大学永青文庫研究センター 准教授）

日時

令和元年11月2日（土）14時～15時30分

会場

熊本大学附属図書館1階 ラーニングコモンズ

### 凡 例

- 一、本図録は、第35回熊本大学貴重資料展「熊本藩に生まれた近代―手永・惣庄屋制と地域行政―」（展示監修：今村直樹）【会期：2019年11月2日（土）～4日（月）】開催にあたり作成したものである。
- 一、図録掲載順番と展示順番は必ずしも一致しないことがある。
- 一、本図録に掲載した主な史料は、細川家文書（財団法人永青文庫所有、熊本大学附属図書館寄託）、松井家文書（熊本大学附属図書館所蔵）、古閑家文書（古閑孝氏所有、熊本大学寄託予定）である。
- 一、本図録の作成にあたり、とくに吉村豊雄・三澤純・稲葉継陽編『熊本藩の地域社会と行政』（思文閣出版、2009年）、稲葉継陽・今村直樹編『日本近世の領国地域社会』（吉川弘文館、2015年）を参考にした。両書を除いた参考文献のみ、解説文のなかで示した。
- 一、掲載している写真は、所蔵先の許可なく転載・複写することを認めない。
- 一、本展示会および本図録は、JSPS科研費19H01310、18H02288による成果の一部である。
- 一、本図録の編集は、熊本大学永青文庫研究センタースタッフの協力のもと今村直樹が担当した。

# I 手永・惣庄屋制とはなにか

近世の幕府や諸藩は、村々から構成される地域社会を治めるために、村政の責任者である名主や庄屋の上位に、大庄屋（惣庄屋）と呼ばれる百姓出身の役人を置いた。大庄屋が管轄した領域は、全国的に組・筋・郷・触・領・通・宰判などと呼ばれ、手永もその一つである。手永とは、北部九州地方の方言で「手の届く範囲」という意味とされる。

近世後期の熊本藩では、領内全体で五一の手永が存在した。その領域は平均約三〇か村から構成され、その石高は平均約一万五〇〇〇石におよぶなど、小大名の領地に匹敵する規模を誇った。手永の経済的中心地には、惣庄屋の執務機関として手永会所が置かれていた。

1

（近世後期）  
木倉手永絵図

## 街道や河川によって結ばれた手永の領域

近世後期の<sup>かみましきぐんきのくら</sup>上益城郡木倉手永を描いた絵図。同手永の石高は約一万三〇〇〇石で、その領域はほぼ現上益城郡御船町に相当する。手永などの大庄屋の行政区は、大名権力によって上から均一に設定されたものと見られがちだが、その領域は街道沿いや水系沿岸の村々から構成されており、中世以来の郷や庄などの地域結合を継承するものであった。

木倉手永の場合、熊本と日向国の<sup>のべおか</sup>延岡を結ぶ<sup>ひょうが</sup>日向<sup>おうかん</sup>往還がその東西を横断しており、絵図中央よりやや左上に描かれた橋は、安政二年（一八五五）に完成した<sup>や</sup>八<sup>せめがねばし</sup>勢眼鏡橋（熊本県指定重要文化財）の可能性がある。また、



木倉手永絵図（細川家文書101.77）

2

天保六年（一八三五）九月  
職制

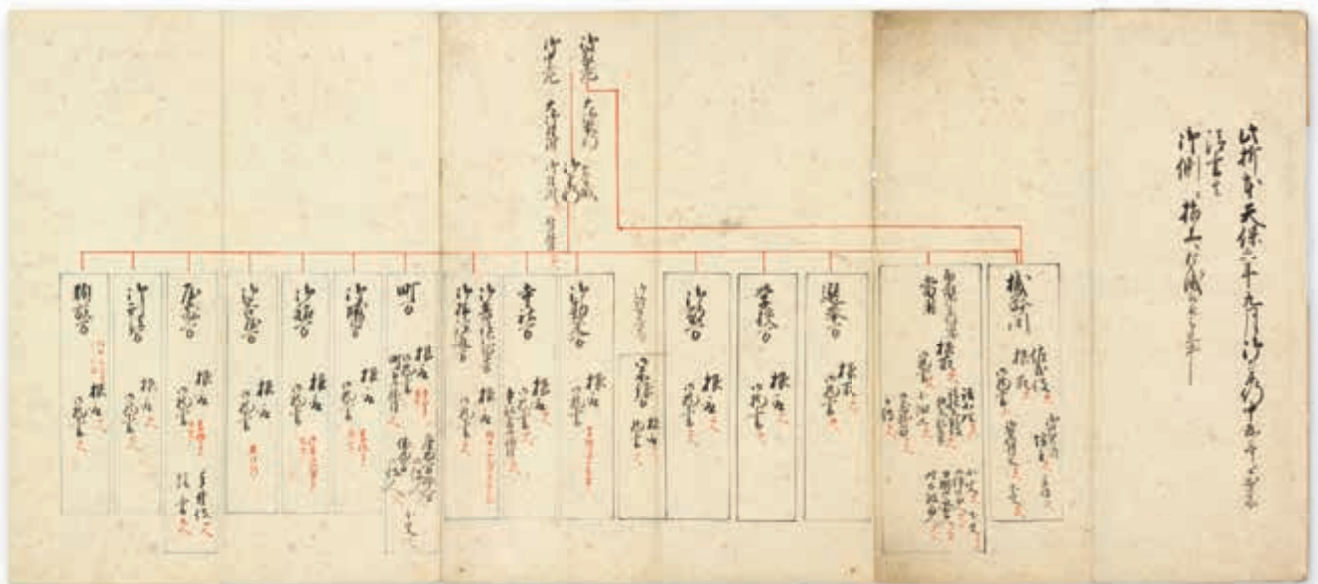
## 九〇〇〇人以上によって支えられた 熊本藩の運営！

当時の藩主細川斉護のために作成された、熊本藩の職制機構図。行政・軍事・家政に関わるすべての役職名とその人員が記されており、熊本藩の運営が九〇〇〇人以上によって支えられていたことがわかる（熊本大学永青文庫研究センター編『永青文庫叢書 細川家文書 熊本藩役職編』吉川弘文館、二〇一九年）。当時の熊本藩の知行取は約一二〇〇人であることから、その他に多くの下級武士や非領主身分の人びとが藩の運営に携わっていたことがわかる。藩政部局のなかでも最大の人員を有したのは、地方行政を担当した郡方である（約一八〇〇人）。

注目されるのは、郡方の人員の九割以上を占めていたのは、じつに手永の役人たる惣庄屋たちや在御家人（いわゆる金納郷士）であった事実である。藩政における地域行政とそれを支えた非領主身分の重要性を、端的に物語る貴重な史料である。

その上には、熊本藩の御用絵師杉谷雪樵による絵図（七滝御覧図）でも知られる「七瀧」と、藩主のための「御覧所」が描かれている。





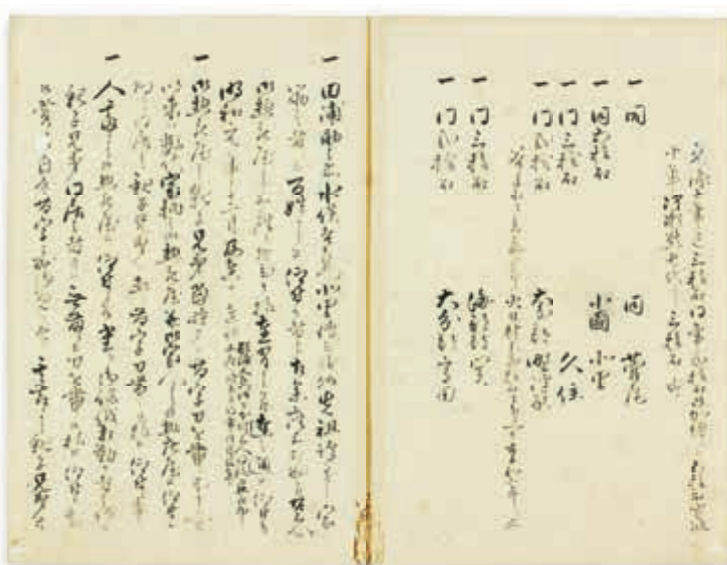
職制(細川家文書8.4.79丁.1)

3 (天保期)  
役員蹟覽 十三上

### 国境の要衝を任された惣庄屋たち

役員蹟覽は、十八世紀後半以降の奉行所(藩庁)を中心とした各役職の沿革を、天保期にまとめたもの。惣庄屋の沿革も取り上げられているが、注目されるのは、いずれも国境の手永を担当する田浦助兵衛(芦北郡田浦手永)・水保吉左衛門(芦北郡水保手永)・北里伝兵衛(阿蘇郡北里手永)・郡浦又左衛門(宇土郡郡浦手永)の四家が、領内の惣庄屋の「上座」に位置づけられ、特権的な待遇を受けていた事実である。

後述するように熊本藩では、十八世紀半ばの宝暦改革を中心として、戦国期以来の在地有力者が務めていた惣庄屋が淘汰され、新たに一般百姓層から登用された惣庄屋が、任地(手永)を転動するようになる。しかし、田浦・水保・北里・郡浦の四家は、他手永に転勤することなく、代々同じ手永の惣庄屋職を世襲した。他手永一般の惣庄屋とは異なり、国境の要衝を担当する職務内容の特殊性がうかがえる。



役員蹟覽 十三上(細川家文書8.5.11.19)

## 大名行列を先導する惣庄屋

万延元年（一八六〇）、新藩主として初めて熊本に入国する細川慶順（後の韶邦）の行列を描いたもの。藩主の邸宅である花畑屋敷前（現熊本市中央区花畑町）で到着を待つ細川家臣の姿から、行列の最後尾までが描かれている。出迎えの列は、小幡宮（現熊本市中央区子飼本町）まで及んだ。

興味深いのは、熊本入りする行列の先導役を、熊本城下に隣接した飽田郡五町手永の惣庄屋、庄屋、在御家人たちが務めている点である。大名行列における惣庄屋たちの役割を考える上で示唆的な絵図である。



御入国御行列之図（細川家文書212.13）

## Ⅱ 熊本藩政の成立と惣庄屋

細川家による手永・惣庄屋制の採用は、慶長五年（一六〇〇）の関ヶ原合戦の後に入封した豊前小倉時代に遡る。元和七年（一六二二）に家督を継承した細川忠利は、年貢・諸役の徴収の正常化、および知行取家臣（給人）の百姓に対する私的権力行使を抑制するため、惣庄屋制の改革に着手する。その結果、地域社会の立て直しが進み始めた矢先、寛永九年（一六三二）に忠利は、加藤家改易後の肥後熊本への国替えを命じられた。忠利は、肥後の地でも手永・惣庄屋制の構築をはかっていた。

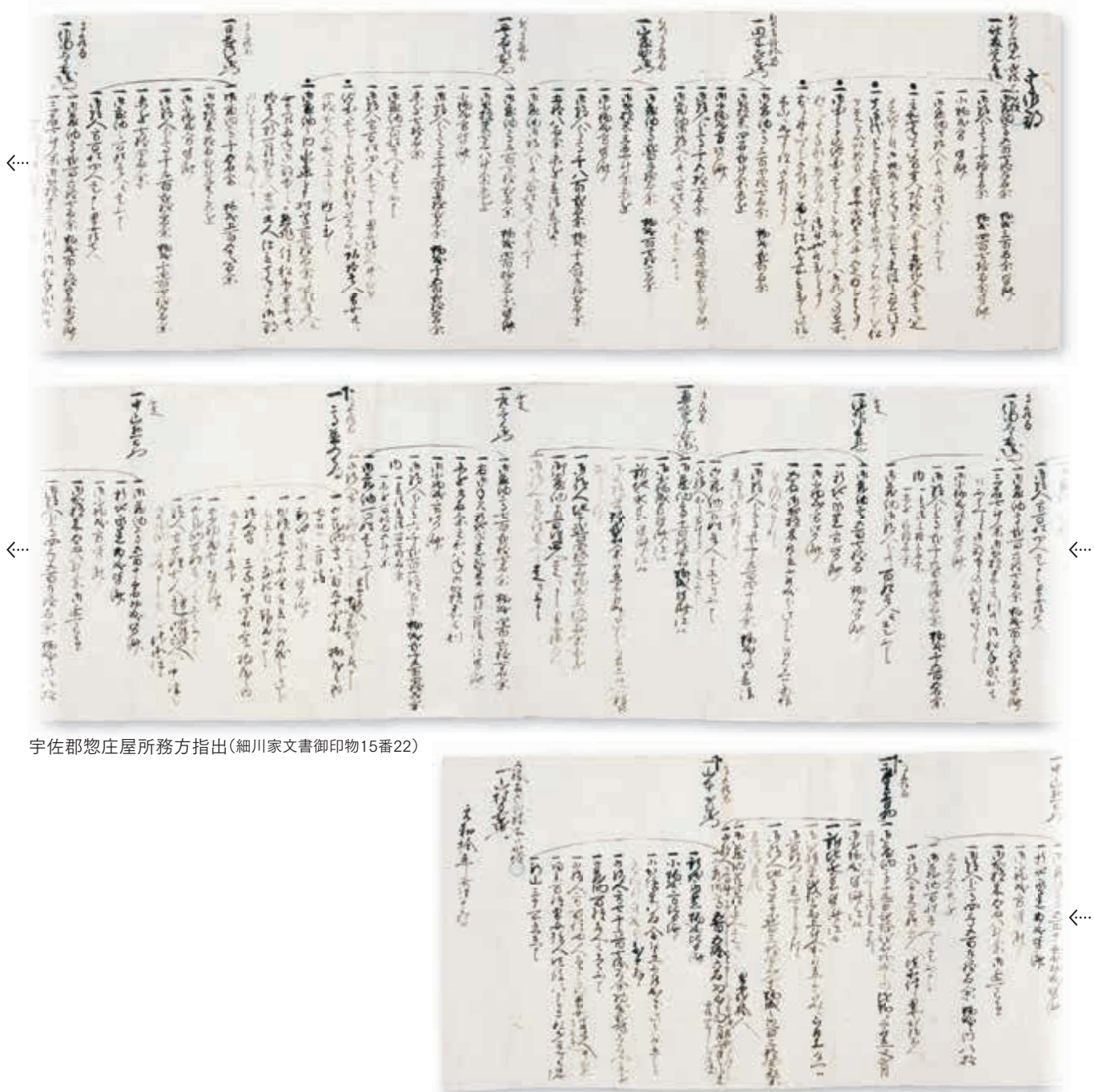
5 （元和八年（一六三二）三月四日  
細川忠利達書

知行地で紛争が生じたら、  
まずは惣庄屋が解決にあたれ

家督相続後、参勤のため江戸に滞在中の忠利が、国許の惣奉行（小篠・浅山・仁保・続）に与えた指示。本書テーマとの関係で重要なのは四か条目である。給人地（大名が給人に宛行った百姓付の土地）の支配をめぐり給人・百姓間で紛争が生じたら、給人の実力行使を抑止させた上で、まずは「惣庄屋」（手永）がその解決にあたるように。惣庄屋による解決が困難な場合は「郡奉行」（郡）の案件とし、それでも難しければ、「奉行所」（惣奉行）、さらに「年寄共」（家老衆）の取り扱いとするように。百姓の行為の善悪に関わらず、給人の実力行使だけは絶対に避けるよう、家臣団に厳密に周知させよ。以上のように忠利は惣奉行に厳命している（稲葉継陽『細川忠利』吉川弘文館、二〇一八年）。給人の百姓に対する私的権力行使を抑制し、公的な行政制度の確立をめざす忠利の意図が見てとれる。







宇佐郡惣庄屋所務方指出(細川家文書御印物15番22)

7 (寛永九年(一六三二)カ)  
芦北郡庄屋之覽

## 惣庄屋の候補者は 戦国の動乱を生き抜いた強者たち

忠利の命をうけた沢村大学・宇右衛門父子が、水俣村庄屋の吉左衛門尉をはじめとする芦北郡の庄屋九人の履歴を調査した報告書。細川家の肥後入国が決定した寛永九年あるいはその直後のものと考えられる。

この報告書によると、一か条目の吉左衛門尉の父親は深水帯刀という人物で、慶長五年の関ヶ原合戦で西軍に属した島津軍が、東軍方の加藤清正領の芦北郡一帯に侵攻した際、家を取り囲んだ島津家の武士たちを騙して妻子とともに退散し、敵将の新納武蔵守忠元を激怒させたという。また帯刀は、天正十五年(一五八七)の豊臣秀吉による薩摩攻めの際、その進軍路として大口の道を案内したとされる。八か条目の田浦村庄屋の助兵衛の親も、文禄元年(一五九二)の島津家臣の梅北国兼による佐敷城占領事件(梅北一揆)や慶長五年の島津軍の芦北郡侵攻時に活躍した人物で、助兵衛自身も「りはつなる者」と評価されている。

その後、吉左衛門尉は水俣手永惣庄屋に、助兵衛は田浦手永惣庄屋に任命され、両家はその惣庄屋職を明治三年(一八七〇)まで世襲した。薩摩との国境を担う惣庄屋の人選を、細川家が重視していたことを示す史料である。





芦北郡庄屋之覚(松井家文書453)

8

寛永十年(一六三三)四月十四日 慶長五年九月廿七日 芦北郡之内田  
浦村百姓治部少乱之時薩州江取越人数之帳

## 島津軍に連れ去られた 芦北郡田浦村の人びと

慶長五年九月の島津軍(出水衆)による芦北郡侵攻の際、彼らによって掠奪(人取り)された田浦村の百姓たちの実態を、寛永十年(一六三三)四月に調査したものの。芦北郡に侵攻した島津家臣である出水衆は人と牛馬を対象とした激しい掠奪を行い、田浦村での被害者は二二〇人にのぼった。そのうち一六〇人に関しては寛永十年時点での居場所もわかり、多くが島津領内にいた。出水衆のもと下人・下女として召し使われ、あるいは借金のかたに売られたりして、各地に分散したものと考えられる。彼らは、三三年間、国境を越えて故郷の田浦村に戻ることは一度も出来なかった。

この史料は、寛永九年の細川家肥後入国という領主の代替わりを受けて、「代替り徳政」を求めた田浦村の百姓たちが、かつて島津軍に連れ去られた家族や仲間たちの返還交渉を島津家と行うよう、新領主の細川家に求めたものと考えられる(坂田聡・榎原雅治・稲葉継陽『日本の中世二二村の戦争と平和』中央公論新社、二〇〇二年)。史料に作成主体は明記されていないが、その内容の詳細さを鑑みても、庄屋である田浦助兵衛たちが関与した可能性は非常に高い。三三年前の内戦は、国境の村々に深い爪痕を残し続けていたのである。



芦北郡之内田浦村百姓治部少乱之時薩州江取越人数之帳  
(細川家文書神雜1.61.3)



(寛永十二年(一六三五)正月十六日  
阿蘇郡惣庄屋衆伺書

## 地域開発の担い手となった惣庄屋たち

細川家は肥後入国直後から、阿蘇郡の湿地開発、熊本平野部の灌漑水路開発、海浜部の新田開発といった地域開発事業を推進した。本史料は、坂梨助兵衛・内牧徳右衛門など阿蘇谷の惣庄屋三名が、阿蘇郡の湿地開発(むたひらき)に関して、惣奉行を通じて忠利に提出した伺書である。

これによると、惣庄屋たちは入植した百姓たちの経営状態を上・中・下に区分し、飯米が欠乏している中・下の三四〇人に、一人あたり一日六合、合計二〇〇石の扶助が必要であるとして、借米を願い出ている。その理由として惣庄屋たちは、中・下の百姓たちは「他所」から入植した者であり、阿蘇谷に適した作付方法や耕地の良し悪しに「無案内」であった点を指摘している。惣庄屋たちは、入植百姓の経営状況やその農業技術的背景を具体的に把握した上で、地域開発に従事していたのである。なお、この上申に対して忠利は、飯米の貸与ではなく給与が良いと裁可している(前掲稲葉『細川忠利』)。



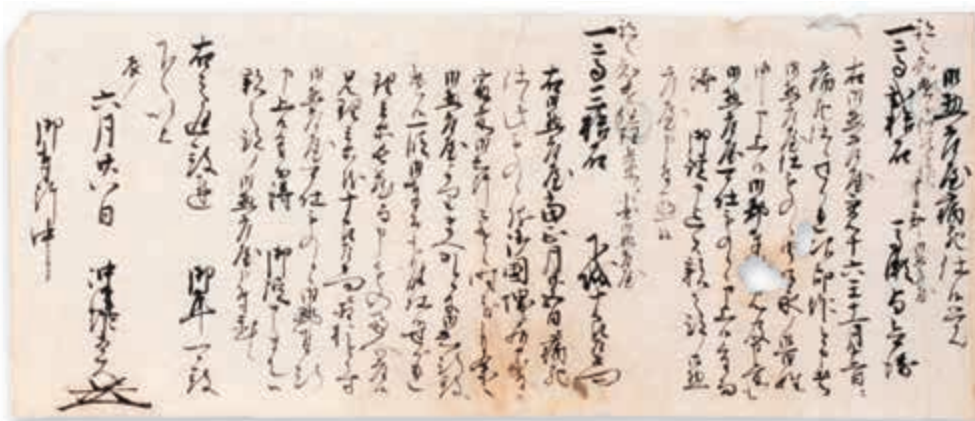
阿蘇郡惣庄屋衆伺書  
(細川家文書44印5番)

(寛永十七年(一六四〇)六月二十八日  
御惣庄屋病死仕候覚

## 手永の百姓中に支持された新たな惣庄屋候補

寛永十七年六月に郡方担当奉行の沖津作太夫が、惣奉行を通じて惣庄屋二名の後任人事案を忠利に上申したものの。そのうち、前年十一月に病死した宇土郡惣庄屋の馬瀬与兵衛の跡役には、彼の息子である次郎作が、「手永ノ御百姓中」からの「申上」を理由として推薦されている。新たな惣庄屋

の人選は、細川家の意向だけで決まるものではなく、あくまで手永の百姓たちの信任が前提であった(前掲稲葉『細川忠利』)。近世初期の惣庄屋人事と地域社会との関係を示した興味深い史料である。



御惣庄屋病死仕候覚  
(細川家文書御印物56番19)

### III 藩政改革と手永・惣庄屋制

肥後入国後、細川忠利によって導入された手永制は、十七世紀後半には五三手永に固定され、その領域は明治維新までほぼ維持されていく。また、十七世紀後半以降、惣庄屋の職務権限は拡大し、年貢徴収を行う代官役を兼ねるようになる。こうした手永・惣庄屋制の整備を経て、著名な細川重賢の宝暦改革が実施される。宝暦改革により能力主義に基づく惣庄屋の任免は徹底化され、彼らの多くは一定期間で任地を転勤する存在となった。

11 承応三年（一六五四）二月五日  
申渡条々

#### 拡大する惣庄屋の職務権限

忠利は寛永十八年（一六四一）三月に死去し、続く藩主細川光尚も慶安二年（一六四九）十二月に死去する。次の藩主細川綱利はわずか六歳であり、藩政は奉行と家老の合議制で運営された。

本史料は、承応二年（一六五三）八月の大規模な台風被害の後、翌三年二月に全郡奉行に宛てられた達書である。これによると、一か条目では、蔵入地の年貢率決定権と収納権を各手永の惣庄屋に付与すること（蔵入地代官役の兼帯）、二か条目では、給人地にお

ける年貢率決定のあり方を郡奉行が監督・報告し、もし従わない給人がいれば文書で報告するように定めている。また、本史料と合わせて全惣庄屋宛にも達書が出されているが、そこでは手永内の給人地の年貢率に不平等が生じた場合、惣庄屋が当該給人の下代と交渉して不正なく処置することが規定されている。これは、長年の課題であった給人による個別領主権の行使、および個別代官支配に関わる問題の克服を、惣庄屋の権限拡大という措置で一挙に推し進めるものであった。

この措置は、大規模な自然災害後の時限的な政策であったとみられる。しかし、惣庄屋が蔵入地代官役を兼帯し、さらに給人地の年貢収納業務自体までを担うことは、その後の延宝期・正徳期の改革を経て最終的に定着する（松本寿三郎『近世の領主支配と村落』清文堂二〇〇四年）。惣庄屋は、手永内の蔵入地・給地を問わず、代官役を兼帯する存在となったのである。



申渡条々（「綱利公御家譜二」細川家文書106.7.9）

12 （宝暦五年（一七五五）八月  
口上之覚

#### 職務内容に「不吞込」な惣庄屋はクビにする！

細川家の肥後入国後、惣庄屋は在地有力者の家が務め、その職は世襲される傾向が強かった。しかし、十八世紀半ばの宝暦改革を契機に、従来の在地有力者の免職が進み、代わって惣庄屋は在御家人（金納郷土）や一般百姓から新規採用されるようになる。

寛延三年（一七五〇）八月、藩主細川重賢は家老たちに対して、農村部の秩序が乱れており、惣庄屋以下地方役人の働きぶりに問題があるとして、郡奉行への指導を徹底するように命じた（靈感公御家譜続編十八）細川家文書七三・一八。その結果、宝暦五年（一七五五）八月に郡奉行の白石伝内と宇野一郎右衛門は、玉名郡中富手永惣庄屋の中富弥次右衛門を免職するよう上申している。その免職の理由は、職務内容に対する弥次

右衛門の理解が悪く（「不吞込」）、惣庄屋の器量ではない、というものであった。惣庄屋の任免に際して、能力主義が徹底化されていた事実を示す史料である。



口上之覚  
（「宝暦五年同六年 讃談帳」細川家文書9.1.1）



## 領内の惣庄屋全員による藩政への 異議申し立て

明治七年（一八七〇）六月、領内の惣庄屋は一五一か条にわたり、地方行政に対する異議と要求を書き連ね、同時にその対応・解決策を示した意見書（繁雑帳）を藩に提出した。これは、宝暦改革を主導した大奉行の堀平太左衛門が、藩の地方行政における改善点の洗い出しを命じ、それを受けた惣庄屋全員が一度の会議（寄合）を経て作成したものである（吉村豊雄『日本近世の行政と地域社会』校倉書房、二〇一三年）。惣庄屋たちが定期的に会議を開き、地方行政の課題とその改革案について意見書を作成する動きは、『繁雑帳』以降の近世後期にはますます盛んとなり、藩政に大きな影響を与える存在となった（三澤純『維新変革期における民政と民衆』明治維新史研究の今を問う『有志舎』二〇一一年）。

「繁雑帳」の内容は、後代の惣庄屋や地方役人も参照した。本史料は、文政十三年（一八三〇）に飽田郡の地方役人を務めていた古閑才右衛門（後の才蔵）が、下益城郡砥用手永・宇土郡松山手永などの惣庄屋を歴任した三隅丈八より借り受けて筆写したものである。

一か条目では、高札場の建て替え・修復問題が取り上げられている。都市部（町方）の高札場は藩が費用を負担する一方で、農村部（郡中）の場合は郡中の自己負担でなされており、それが不公平であるとして、都市部同様に藩が費用負担すべきことを惣庄屋たちは求めている。これに対する藩側の回答は「御付紙」と記された部分であり、今後は農村部と同様に、都市部の高札場も町方の負担とすることが示されている。

## 14 文化八年（一八二二） 官職制度考 乾

### 藩国家の「県令」と位置づけられた惣庄屋



繁雑帳（古閑家文書追274）

「官職制度考」は、文化八年（一八二二）に奉行所根取の垣塚文兵衛が編纂したもの。熊本藩の官職制度が詳述されており、藩庁たる奉行所の組織・役員数・職務の概要のほか、番方などの役職も網羅的に記述されている。細川家とその統治する領域は「国家」と位置づけられ、中国の古代王朝である周の理想的な統治制度をまとめた「周礼」をもとに、藩政機構が周王朝の官制になぞらえてある。家老は「大夫」、奉行は「六卿」、機密間は「秘書省」といった具合である。十八世紀以降の日本では「周礼」への学問的な関心が高まり、そこに記された統治制度は、幕末維新期の政治改革や官僚制の形成に大きな影響を与えた（羽賀祥二『明治維新と「周礼」』『年報近現代史研究』創刊号、二〇〇九年）。

本史料で興味深いのは、周の官制になぞらえて、惣庄屋が「県令ノ類」、惣庄屋の執務機関である手永会所が「官廨」と呼ばれている点である。県令とは、古代中国で用いられた官職の一つであり、県という地理的区画の行政を担当する、中央政府から派遣された長官名をさしていた。宝暦改革を経て、惣庄屋の多くは任地を転勤する存在となっており、転勤惣庄屋は県令のイメージにも合致していた。惣庄屋は、藩国家を支える「県令」と位置づけられたのである。



官職制度考 乾  
（細川家文書1.4.16.1）

## 有明海沿岸を襲った大津波の恐怖！

寛政四年（一七九二）四月一日に発生した雲仙岳眉山の山体崩壊と、熊本藩領の有明海沿岸部を襲った津波（島原大変肥後迷惑）を描いた絵図。右上の墨書によると、四月六日の「小早」（小型の早船）による報告と絵図をもとに、長洲（現玉名郡長洲町）に逃げてきた僧侶の口述と絵図、島原へ二度派遣された飛脚の報告、さらに金峰山の頂上から遠眼鏡で見渡した内容を加味し、作成されたという。

絵図の中央上部では雲仙普賢岳が炎と煙をあげ、その下方では「前山」（眉山）の山体が崩れて海へなだれ込んでいる。山体崩壊で引き起こされた津波は、玉名・鮑田・宇土三郡の沿岸部を襲い、白い波が陸地までかかっている様子が見てとれる。海上には、流失した家屋・戸板・樹木・船と、それにかまって漂流する人の姿が描かれている（『震災と復興のメモリー』@熊本県立美術館、二〇一七年）。



嶋原地震（細川家文書45印60番）

## 津波被害からの村の復興を支えた手永

本史料の「覚帳」は、藩庁の地方行政担当部局である郡方の簿冊文書であり、農村部からの上申事案と藩庁による事案の審議・行政処理の記録が収録されている。基本的に年次でまとめられており、後掲の「町在」と同様、非常に分厚い簿冊である。寛政末年以降は、上申文書の原本が起案書として扱われ、これに郡方などの審議・決裁部分を加筆されて、一括で収録されるようになる。「覚帳」や「町在」に収録される文書の用紙は定型化されており、領内の手永会所には、藩庁への上申文書用の用紙が配布されていた。

本史料は、寛政四年の「島原大変肥後迷惑」で壊滅的な被害を受けた、宇土郡郡浦手永の三角浦村（現宇城市）と長浜村（現宇土市）の復興政策に関するものである。宇土半島に位置する郡浦手永は、約一二〇〇人の溺死者を出すなど、甚大な津波被害を受けていた。両村の本格的な復興政策は文化十一年（一八一四）に始まり、「覚帳」には二年間にわたる総数二七点の文書が収録されている。

注目されるのは、両村の復興政策の立案主体として機能したのが郡浦手永であったことである。惣庄屋は、両村の復興助成の内容を取りまとめた上申文書を、上役の郡代に提出した。三角浦村では、助成を必要とする百姓の個人名が書き上げられ、具体的な金額の見積もりがなされている。手永は村からの要望をふまえ、具体的な救済対象者の選定にも関与したのである（前掲吉村『日本近世の行政と地域社会』）。両村の復興政策は、手永の上申に基づき、藩の事業として実施された。





文化十三年 寛帳  
(細川家文書文5.3.6)



請免二付上ヶ米等請書(永青文庫研究センター所蔵)

17 (近世後期)  
請免二付上ヶ米等請書

## 定額年貢を請け負う代わりに、 武士の農村出張は中止された

享和三年(一八〇三)、熊本藩は「請免制」という年貢制度を実施した。これは、豊作・凶作に関わらず毎年の年貢額を固定化するもので(定免制)、定額年貢を請け負うのは村ではなく、手永に設定された(手永請)。  
請免制の導入には、大坂米市場での商品価値が極めて高かった「肥後米」を熊本藩から安定的に確保したいという、大坂商人の意向も反映されていた(今村直樹「近世後期藩領国の行財政システムと地域社会の『成立』」『歴史学研究』八八五、二〇一一年)。

請免制は、手永に数千石規模の年貢量の安定的確保を義務付けるものであり、藩は惣庄屋たちとの交渉を繰り返して、最終的に実現までこぎつけた。注目されるのは、交渉のなかで領内の惣庄屋全員が、請免制を受け入れる条件として、手永の行財政機能や自治の強化に関する要求を出し、それを藩に認めさせた点である。とくに、請免制の実施期間における藩役人(武士)の農村出張(出張)の中止、同じく農村部の祭祀への出張中止を認めさせている点は非常に興味深い。惣庄屋たちは、藩役人の直接的な関与がなくなると、非領主身分による力量で「地方自治」が実現できるのだと宣言したのである。

## IV 惣庄屋たちの実像

宝暦改革を経て、惣庄屋の人事では能力主義が徹底され、その多くは居村を離れて任地を転勤する存在となった。彼らが惣庄屋として栄達できるかどうかは、赴任地における職務実績の如何によった。近世後期の惣庄屋たちの実像に迫ってみよう。

18 明治元年（一八六八）  
町在

### 通潤橋を建設した惣庄屋布田保之助の職務業績リスト

「町在」は、藩庁の人事考課担当部局である選挙方の簿冊文書。町（都市部）と在（農村部）に居住する地域住民の社会的・行政的活動などの功績を調査・報告し、それを褒賞した膨大な行政記録である。細川家文書には、

寛政十一年（一七九九）から明治三年（一八七〇）までのものが現存している（『前掲吉村「日本近世の行政と地域社会」』）。本史料は、著名な通潤橋（現上益城郡山都町）の建設で知られる、上益城郡矢部手永惣庄屋を務めた布田保之助（嶋一輩）の功績に関する調査報告書（御内意之覚）である。ここには、布田が惣庄屋時代に手がけた土木水利事業の実績がまとめられており、通潤橋の工事費用や人夫の数、資金の内訳も掲載されている。報告書の結果、藩から布田は桜御紋付時服や白銀五枚などの褒賞を受けた。時代は下って昭和十一年（一九三六）、布田を祭神とする布田神社が、通潤橋の側に建てられている。

19 安政元年（一八五四）  
町在

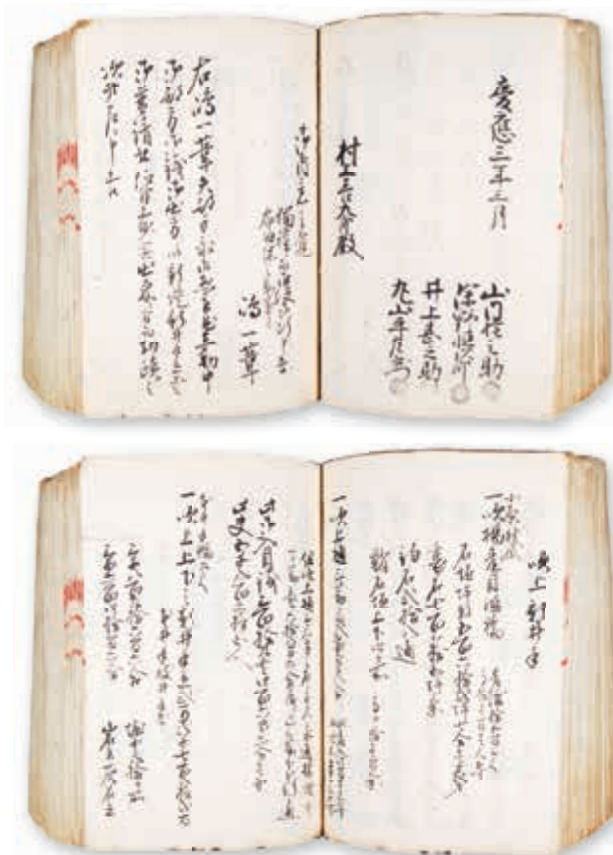
### 阿蘇郡北里手永に赴任した飽田郡出身の惣庄屋古閑才蔵

本史料の「覚」は、託摩郡本庄手永惣庄屋の古閑才蔵の功績を見聞した藩庁郡方の役人（郡目附付横目）が、その内容に相違なき旨を選挙方に報告したもの。古閑は、嘉永元年（一八四八）五月から同五年四月まで阿蘇郡北里手永の惣庄屋を務めた経験を持つが、本史料で注目されるのは、評価対象となった彼の功績の多くは北里手永在任時代のものであった点である。さらに、同手永は「内輪因循之旧弊」も多かったと記されている。これらの事実は何を意味するのか。

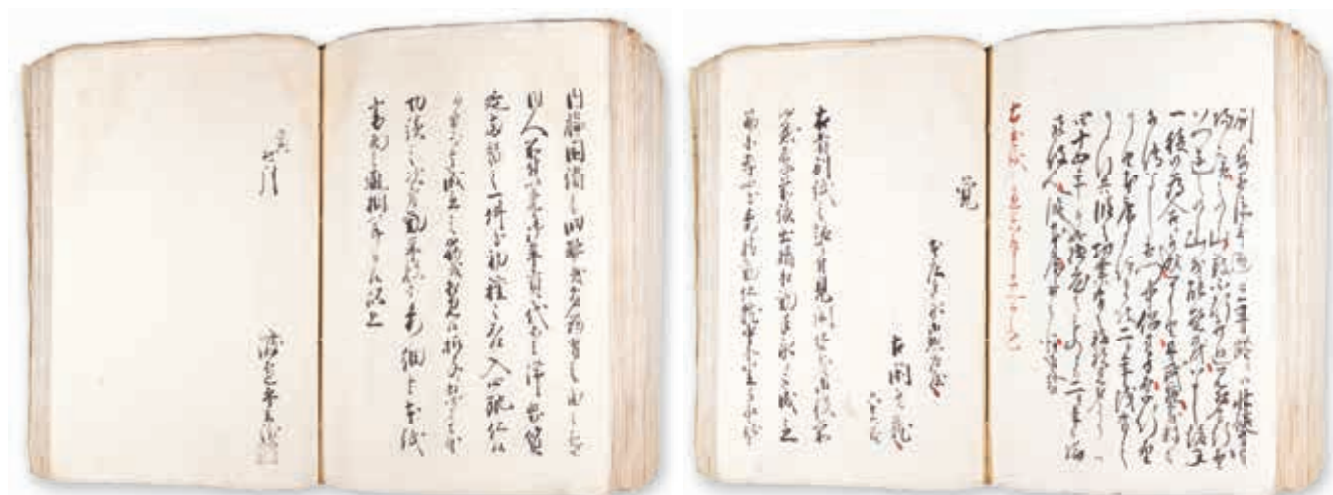
じつは、北里手永では近世初期から北里伝兵衛家が惣庄屋職を代々世襲してきたが、嘉永元年三月、一〇代目の北里伝兵衛一義が職務上の問題から解任された。その直後、転勤惣庄屋として初めて北里手永に赴任してきたのが、飽田郡横手手永出身の古閑であった。北里手永では、長年の世襲惣庄屋制のもと、惣庄屋と庄屋層との間に強固な「癒着」が生まれており、それを是正するために古閑が遠隔地から派遣されたのである（今村直樹「十九世紀熊本藩の惣庄屋制と地域社会」『近世の地域と中間権力』山川出版社、二〇一二年）。



明治元年 町在  
（細川家文書10.3.7）







安政元年 町在(細川家文書9.24.9)

20

嘉永元年(一八四八)  
北里会所 日記

# 新惣庄屋古閑才藏と 北里手永閑係者との初対面！

北里手永閑庄屋在任時の古閑才藏の日記。嘉永元年五月一日、古閑は鮑田・託摩郡代の中島九郎左衛門の自宅に呼び出され、北里手永閑庄屋を拜命した。同三日には熊本城内の奉行所に出頭して、服務規程である「御条目」を確認、惣庄屋就任にともなう誓約書への「血判」を行うとともに、郡代たちに御札を述べている。同十二日は、北里手永への引越準備にあてた。同十三日、古閑は北里に向けて出発した。同日は大津に宿泊し、翌十四日には二重峠(現阿蘇市)を越えて内牧に宿泊。そして翌十五日、内牧を出立した彼は山道の険しさに驚きながらも、昼頃北里会所に到着する。会所役人や庄屋たちは、山中まで出迎えにきた。会所に着くと、さっそく北里手永の閑係者を交えた宴会が始まる。まずは、吸い物・塩魚・山芋・椎茸・結昆布など、続いて鶏卵・味噌・浅草のり・焼玉子・結昆布などが出され、品数の多さに古閑も「其外略ス」としている。北里手永に初めて転勤惣庄屋として赴任した一日目、彼はどのような感慨を持ったのだろうか。



北里会所 日記(古閑家文書5.2.97)

# 大行列となつた惣庄屋古閑才藏の引越し

嘉永五年四月二十九日、北里手永惣庄屋古閑才藏は、託摩郡本庄手永への転任（所替）を命じられる。出身の鮑田郡横手手永にも近接した本庄手永への転任の知らせは、彼にとつて吉報であつたに違いない。

五月三日、古閑は北里手永の会所役人や庄屋たちと「離盆」を交わし、同十七日に北里を出発した。本史料は、北里からの出発に際して古閑が「内牧・千葉城に宛てた「先触」であり、引越し荷物の運送のための夫二三五人と馬一九匹の準備を依頼している。引越し荷物は、長持・半櫃・箆・戸棚・屏風・仏壇など大量であり、転勤惣庄屋の引越しが大規模なものであつたことがわかる。



覚①  
（古閑家文書5.2.21）

# 古閑忠右衛門の惣庄屋就任を祝つた北里手永関係者

本庄手永惣庄屋の古閑才藏が文久元年（一八六二）五月に死去した後、その養子忠右衛門（のち忠左衛門、忠弥）が後任の惣庄屋に任命されたことを受けて、北里手永山支配役の松崎四郎兵衛が忠右衛門に送つた書状。両人は、才藏の北里手永惣庄屋在任時代に面識があつたものとみられる。

書状によると、四郎兵衛は忠右衛門の惣庄屋就任を祝うとともに、就任を「遠境」の北里手永まで知らせてくれたことを謝している。惣庄屋以下地方役人たちは姻戚関係を結ぶなど、相互の結びつきが非常に強かつたことが知られるが、そうした地方役人の交際関係が、藩領規模で展開されていたことを物語る史料である。



覚②



松崎四郎兵衛書状（古閑家文書A217.1）



## V 手永会所と会所役人

惣庄屋の執務機関であった手永会所は、近世初期には惣庄屋の自宅内に設けられたものとみられる。しかし、在地有力者の家による世襲の否定や、転勤惣庄屋制の導入がなされると、手永会所は惣庄屋の自宅から分離し、独立した役所として新設される。手永会所は、地域社会の経済的拠点である「在町」〔藩から制限付きで商業を許可された小都市集落〕に置かれることが多かった。

手永の責任者たる惣庄屋・郡代手附横目・山支配役（手永三役）、彼らの下で行政実務を担った手代・下代・会所詰・小頭などの会所役人、会所役人を兼帯することでも多かった村庄屋たちは、「地方役人」と総称される。なかでも会所役人は、手永会所詰の専任職員であり、手永の地域行政に不可欠な存在であった。

23

文化十年（一八三三）十一月  
御手鑑

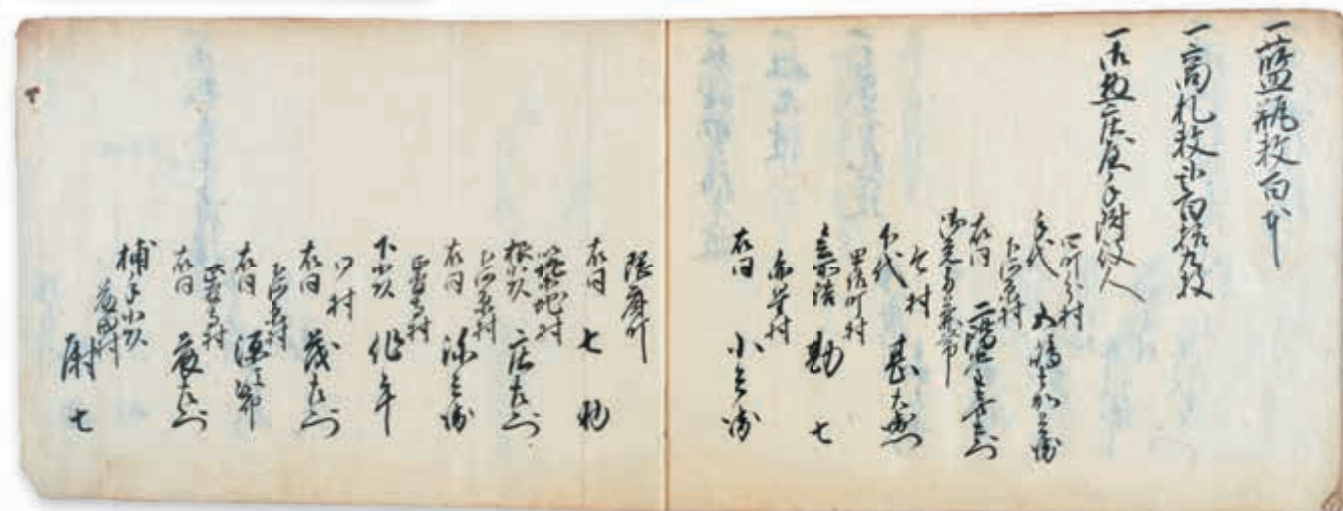
### 二〇名以上で構成された会所役人たち

熊本藩領の惣庄屋や会所役人たちは、その担当する手永の人畜・田畑・年貢から、地方役人・在御家人（金納郷土）・寺社・名所などに至るまで、地域社会の実態を詳細に記した備忘録を携帯し、自らの職務にあたっていた。これを「手永手鑑」と呼ぶ。その多くは、松本寿三郎監修『肥後国郷村明細帳』（全三巻。青潮社、一九八四年）で紹介されている。

本史料は、文化十年（一八三三）十一月に作成された菊池郡河原手永の手鑑である。これには、「御惣庄屋手附役人」として、手代の五嶋嘉兵衛以下一五名の会

所役人が書き上げられている。同手永の会所は、経済的中心地である隈府町（現菊池市）にあったが、会所役人たちの出身地は同町のみならず、手永内の村々に散らばっている。後述する会所見習などを含めると、会所役人の総員は二〇名を超えた可能性が高い。

会所役人の総員は、宝暦改革の直後で五名程度の手永もあったが（松崎範子「十九世紀の宿場町を拠点とする地域運営システム」『細川家の歴史資料と書籍』吉川弘文館二〇一三年）、明和七年の「繁雑帳」や享和三年の請免制を経て、手永が担うべき社会的役割が拡大すると、その人員も急速に増加した。十九世紀前半の時点では、多くの手永で会所役人の総員が二〇名を超えている。彼らは、増加傾向にあった手永会所の業務に従事した。



御手鑑

（松本寿三郎氏収集資料202、熊本大学文学部日本史研究室所蔵）

## 五手永分の会所官錢の総額は 約五〇万石！

享和三年（一八〇三）の請免制の実施後、各手永は数千石規模の年貢量を安定的に確保し続けるため、自らの財政強化を進めた。手永会所には、手永・村の行政経費を賄う地域入用（会所并村出米錢）の残余のほか、請免制とともに備蓄が認められた質屋・造酒屋の運上錢、富裕層からの献金（寸志）、新規開拓地からの収入が蓄積され、それらは手永の管理財源として、文政年間には「会所官錢」と呼ばれるようになる。会所官錢は、通潤橋の建設に象徴される手永の水利土木事業や、荒廃農村の復興や貧民救済にもひろく運用された（今村直樹「近世中後期の地域財政と地域運営財源」『永青文庫研究』二、二〇一九年）。

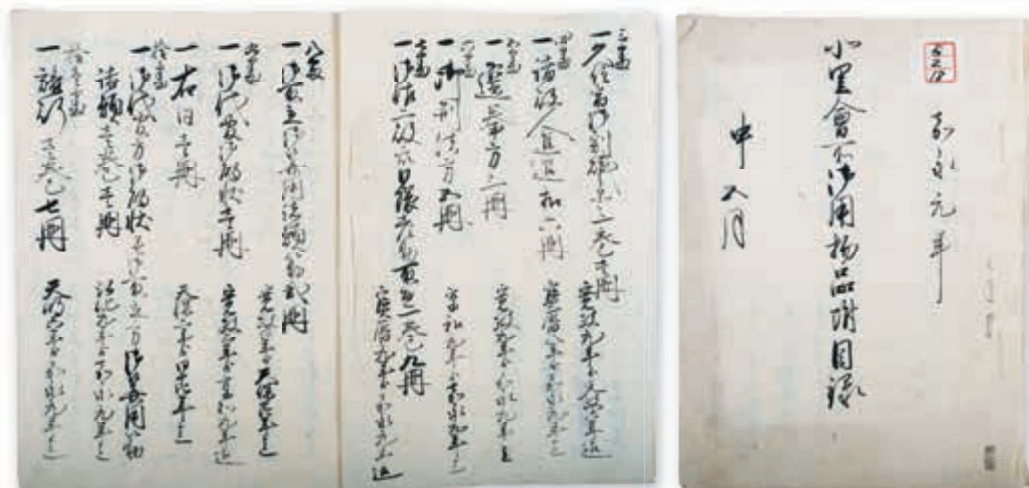
本史料は、地方行政担当部局である郡方の命を受け、その役人たちが足かけ五年間にわたり、領内各手永の会所官錢の運用状況を調査したものである。各手永における会所官錢の取り扱いに混乱がみられたため、それを是正するのが調査の目的であった。調査の結果、判明した天保十四年（一八四三）時点の会所官錢の総額は、金二五〇〇両余、銀四〇貫余、錢（藩札）三万二〇〇貫余、米穀二〇万五〇〇〇石余である。これを当時の米価で換算すると約五〇万石、運用に回されていない現有分だけでも約一三万石が存在していた。近世後期、手永の財政は急速な成長を遂げていたのである。



諸御郡会所々諸官錢臨時改帳  
（「天保十四年 覚帳」細川家文書文6.3.25）

## 手永会所における行政文書の管理

嘉永元年（一八四八）五月、阿蘇郡北里手永会所の手代（松崎謙吾）から惣庄屋に就任した古閑才藏に引き渡された、同会所の物品目録。諸記録（二六一冊）・古諸帳面書附類（四八八冊）・会所備書籍（一四〇冊）・会所附諸道具（四七点）・御客屋定附道具（七二点）・御支配錢根帳・会所備根帳から構成されている。地域行政の拠点たる手永会所に相応しく、大量の行政文書や書籍、諸道具、財政帳簿が管理されていたことがみとれる。行政文書類の充実ぶりは、明治期以降の市町村自治体のそれと比べても遜色がない。



北里会所御用物品附目錄  
（古閑家文書5.2.18）

諸記録では、藩庁部局である選挙方や刑法方の関係文書のほか、諸役人の進退に関する記録などが存在している。肥後と豊後の国境に位置する北里手永は、北西に幕府領の日田を控えており、その御用達である日限彦助と熊本藩との往復書状の記録も管理されている。



## 地域社会の防災を担った会所役人たち

「会所分職帳」とは、手永会所における会所役人ごとの担当業務を記したものだ。本史料によると、当時の託摩郡本庄会所では、手代の石原茂右衛門以下二二名の会所役人の担当業務が詳細に決められていた。会所役人一人あたりの担当業務数は、幹部役人クラスで二〇～三〇程度、中堅クラスで一〇～二〇程度であり、本庄会所の業務数を総合すると二九八件（重複あり）に及ぶ。天保六年時点の同会所における業務総数は一四三三件であり（天保六年本庄会所役人中分職究帳）古閑家文書五二二四、会所の業務量が増加傾向にあったことがうかがえる。

本史料で興味深いのは、徴税・土地管理・勸農・普請・刑政などのほか、地域防災や消防も業務に含まれている点である。外廻小頭の場合、白川が洪水した際の渡鹿堰（現熊本市中央区渡鹿）の管理、長六橋（現熊本市中央区河原町）から本山渡し場（現熊本市中央区本山）まで増水した際の水防業務を担当している。地方公共団体が担う防災業務の歴史的起源について考えさせられる史料である。



本庄会所役人中分職帳  
（古閑家文書5.2.30）

会所役人の年間出勤日は  
平均二五〇日以上！

井手家文書は、飽田郡池田手永の会所役人を務めた井手家に伝来したもの。本史料は、文久四年（元治元年、一八六四）の同手永における会所役人の個人別年間出勤簿。最も出勤日数が多いのが根役福田常右衛門の三〇二日間で、そのほか二九〇日以上的人物も三人存在している。本史料全体でみても、年間で総日数の約七割に相当する二五〇日以上に出勤した人物がほとんどであり、会所役人が常勤職であったことがわかる。天保七年の玉名郡の場合、会所役人の休暇日は一ヶ月あたり六日間と明確に規定されていた（『玉名市史 史料篇五』玉名市、一九九三年）。つまり、会所役人とは専門化した存在であり、自家の農業経営の片手間に行えるような仕事ではなかった。

ちなみに、現代の地方公務員の年間休日数は一二〇～一三〇日間程度とされる。勤務時間の問題を措くと、現代よりも近世後期の会所役人のほうが、休暇日が少ない規定だった可能性も否定できない。

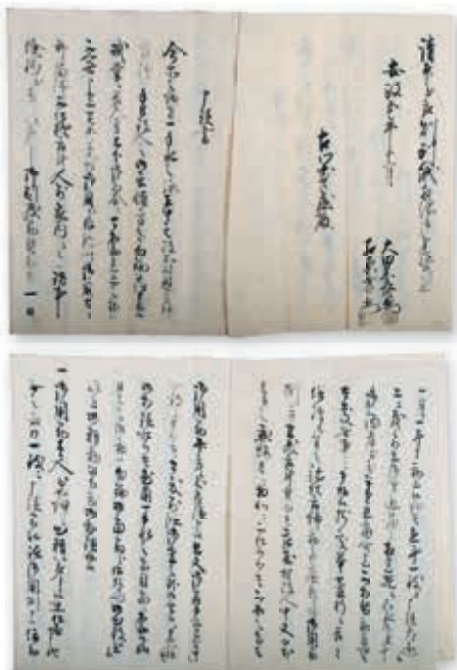


池田会所役人中并見習出勤日記帳  
（井手家文書169、熊本大学附属図書館所蔵）

窓口業務の応対は丁寧に、  
会所内ではチームワークが大事

託摩郡本庄手永の幹部役人である手代たちが、手永会所に勤務する若手たちに、役人としての心構えを示した文書。「会所之儀者一手永之源、在中之役所二而」という象徴的な文言から始まり、惣庄屋のもとで自らの担当業務に精を入れること、村役人や小百姓への応対は懇切丁寧に行うこと、「衆力一致」して業務に取り組むこと、文筆と算術の修業を入念に行うこと、などが説かれている。そして末尾部分では、若手役人たちが文書の内容を了承した証として、彼らによる署名と捺印がなされている。

手永会所における役人たちの言動の規律化および職場教育のあり方を示した興味深い史料である。



申談書①(古閑家文書5.7.25.5)

病弱ですが勉強熱心な二男を、  
ぜひとも会所見習に！

託摩郡上小山村の百姓である清四郎が、二男の虎次を同郡本庄手永の会所見習に採用してほしいと、惣庄屋の古閑才藏に再度願い出たもの。会所見習とは、地方役人のキャリアの出発点に位置し、役人職を志望する一〇代の若者たちで構成されていた。彼らは、手永会所で先輩たちから職業教育を受ける存在で、基本的に無給であったが、見込みありと評価されれば、有給の会所役人に昇進することができた。

本史料で、清四郎が願書を提出した大きな理由は、二男は生まれつき体が弱く百姓仕事に不向きであり、かつ家には男子が四人おり、土地の分与もままならなかったため、とされる。さらに、近年の二男は役人に必要な文筆と算術を熱心に学んでいる、とアピールした上で、もし彼の「走方」に不便があれば、清四郎の老母が



申談書②

二男を召し連れて会所や周辺村々を回る、とまで申し出ている。清四郎の願い出は二度目であり、彼が二男を会所役人に就職させようと並々ならぬ意気込みをもって、願書を作成したことがうかがえる。

この願いが認められたか否かは不明である。しかし、たとえ体が弱くとも、文筆や算術などが得意な場合、百姓ではなく地方役人という職業選択の可能性があったことは重要である。身分によらず、個々人の能力に応じた職業選択の自由を認める明治維新の変革は、すぐ直前に迫っていた。



乍恐奉願覚(古閑家文書5.7.24.5)



## VI 惣庄屋たちの幕末維新

一般に幕末維新といえば、西郷隆盛や高杉晋作など下級武士層の活躍が想起される。しかし、惣庄屋以下地方役人たちも政局のなかで重要な役割を果たすとともに、動揺する地域社会のまとめ役として働き続けた。幕末維新期における彼らの活動の一端を紹介する。

30 慶応元年（一八六五）町在

### 戦争状況下の長州藩に潜入した 竹崎律次郎

竹崎律次郎は、玉名郡小田手永の木下家の二男として生まれ、同郡坂下手永などの惣庄屋を務めた竹崎次郎八の養子となった人物。実兄に、同郡中富手永などの惣庄屋を務めた木下初太郎がいる。明治三年（一八七〇）の熊本藩藩政改革では、後述する徳富一敬とともに具体的な改革プラン（「改革之上書」）を作成した三澤純「熊本藩明治三年藩政改革の再検討」『文学部論叢』

一〇九、二〇一八年）。彼の妻である順子は、下益城郡中山手永などの惣庄屋を務めた矢島忠左衛門の三女であり、明治期の女性教育者として熊本女学校（のちの熊本フェリス学院高校）の校長になったことで知られる。

本史料は、元治元年（一八六四）八月から十二月にかけて、律次郎たち五名が行った長州藩情勢の探索活動に関する記録。長州



慶応元年 町在  
(細川家文書10.3.1)

藩は同年七月の禁門の変で敗北し、「朝敵」として江戸幕府から追討対象とされる。幕府は諸藩に出兵を命じて包囲態勢を整えたが、同年十一月に長州藩が恭順の意を示したため総攻撃は中止となった。第一次長州征討（幕長戦争）である。

律次郎たちは豊前国の小倉（現福岡県北九州市）を根拠地として探索活動を行っており、九月下旬には長州藩領内の岩国（現山口県岩国市）に、十二月下旬には町人の身なりで下関（現山口県下関市）に潜入した（養田勝彦「熊本藩の社会と文化」『八代古文書の会、二〇一五年』。下関での探索活動の成果は、「下関表聞取書」として藩に提出されており、文久三年（一八六三）八月十八日の政変で都落ちした三条実美たち「五卿」の処遇をめぐる長州藩内の議論、十二月十五日に功山寺（現山口県下関市）で挙兵した高杉晋作たち「激徒」の動向、三田尻（現山口県防府市）に向かった高杉が、蒸気船一艘を「乗逃」げしたことなどが詳細に記されている。律次郎の情報収集能力の高さをうかがわせる史料である。

31 (慶応四年(一八六八)三月九日  
赤鉾弥三郎書状

### 豊前・豊後の混乱と 鳥羽・伏見の戦いを伝える書状

慶応四年（一八六八）三月、託摩郡本庄手永惣庄屋の古閑忠右衛門が、同手永出身の地方役人である赤鉾弥三郎から受け取った書状。当時の赤鉾は、熊本藩の預地である豊後国の速見郡別府村（現大分県別府市）にいた。赤鉾によると、正月初めから豊前国の「尾本山」（御許山、現大分県宇佐市）に集った浪士たちが暴動を起こし、日田代官所などを襲撃するとの情報があったので（御許山騒動）、正月十七日から郡代たちに従って別府村に出張し、防戦の覚悟を決めていた。その後、浪士たちは長州藩によつて捕らえられ、今はひとまず安心していているという。以上の事情のため、彼は長らく書状を出せなかったことを古閑に詫びるとともに、郷里にいる老父への配慮を願っている。

追伸部分では、正月初めに起こった鳥羽・伏見の戦いや徳川慶喜の大坂城退去を「京摂大変動」と表現し、「誠二珍しき世之中」になったと驚いている。戊辰戦争初期の政治的・社会的な混乱状況を雄弁に物語る書状である。



赤鉾弥三郎書状(古閑家文書A115.1.2)

## 蘇峰の父である徳富一敬が強く主張した、 約九万石の雑税廃止

「故護久公御事蹟調」は、廃藩置県の際に知藩事を務めていた細川護久の死後、その事績を細川家が調査した簿冊。全五巻。細川家文書は勿論のこと、現時点では失われた旧熊本藩士たちの記録やその談話などが収録されており、史料価値は高い。

ここに紹介するのは、当時郡政局大属を務めていた徳富一敬の談話による、明治三年六月二十三日に熊本城大広間で行われた「大評議」の様子。一敬の父は、芦北郡津奈木手永などの惣庄屋を務めた大善次であり、長男は近代日本の代表的なジャーナリストである蘇峰(猪一郎)である。熊本藩では、同年五月に知藩事が韶邦から護久に代わり、大規模な藩政改革の準備が進められていた。「大評議」では、護久や韶邦、その弟である大参事の護美臨席のもと、改革プランをめぐる最終検討が行われたとみられる(前掲三澤「熊本藩明治三年藩政改革の再検討」)。

注目されるのは、明治三年の藩政改革で著名な約九万石もの大減税政策(雑税解放)が、この「大評議」で決定された事実である。雑税解放を強く主張したのは一敬であり、大小の反対意見を受けながらも、最終的には決定された。一敬は横井小楠の高弟であり、雑税解放は「小楠翁在世之持論」であったという(武藤巖男他編『肥後先哲偉蹟後篇』歴史図書社、一九七一年)。解放された雑税の多くは、手永の財政運営に不可欠な費用であり、雑税解放の結果、手永制自体も解体を余儀なくされた。

## 地域社会からの旧惣庄屋引き留め運動

明治三年の藩政改革で、七月には惣庄屋をはじめとする手永三役が、八月には手永制自体が廃止され、手永は「郷」と改称された。近世初期以来の手永制の廃止は、地域社会にどのような影響を与えたのだろうか。

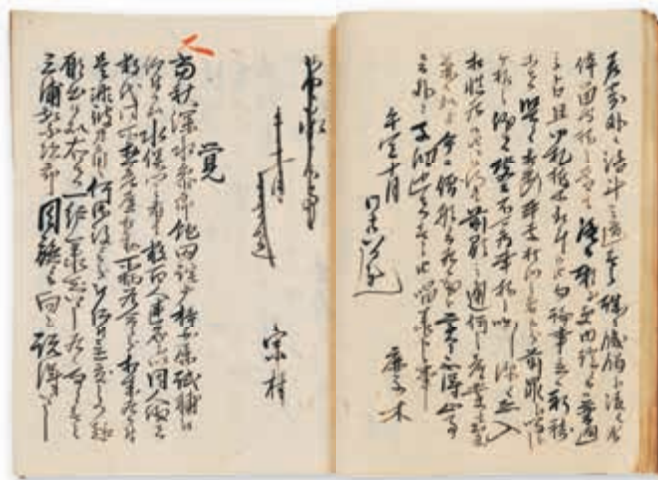
本史料は、芦北郡水俣手永惣庄屋であった深水参郎



故護久公御事蹟調 卷之五  
(細川家文書100.4.39.5)

(水俣吉左衛門)が免職された後、水俣郷で起こった騒動に関する横目の報告書。加藤清正から「水俣」の地名を名乗るよう命じられ、細川家人国後は惣庄屋職を世襲してきた水俣吉左衛門は、明治三年七月に熊本藩へ願書を提出し、本姓である「深水」に復帰していた(花岡興輝『近世大名の領国支配の構造』国書刊行会、一九七六年)。

本史料によると、惣庄屋を免職された深水が飽田・託摩郡担当の郡政役人(権少属試補)に任命されると、彼を地元に戻すべく水俣郷の者たちは数百人の連名で願い出た。世襲惣庄屋であった深水は、温和で慈愛が深く、才力ある人物と評されている。当初、深水の人事の一報が村方に伝わると、小前たちはひどく落胆し、彼を引き戻そうと約六〇〇人が水俣会所に駆け付け、会所詰の役人たちは夜も眠れないほどであった。小前たちは、嘆願のため大勢で熊本に向かおうとしたが制



御横目聞取書①(細川家文書12.8.5)



止され、その代表者七人が芦北郡出身の徳富一敬に談判した結果、深水は八代・芦北郡担当の権少属試補に變更となったという。

廃藩置県後、西日本を中心として、旧領民による旧藩主の引き留め一揆が起こった事実は知られているが（谷山正道『近世民衆運動の展開』高科書店、一九九四年）、地域社会からの旧大庄屋の引き留め運動は珍しい。近世を通じて築かれた、世襲惣庄屋と地域社会との密接な関係を示す事例である。

34

明治九年（一八七六）  
民会議員名簿 第十一大区

## 明治期、議員として地方政治を リードした旧惣庄屋たち

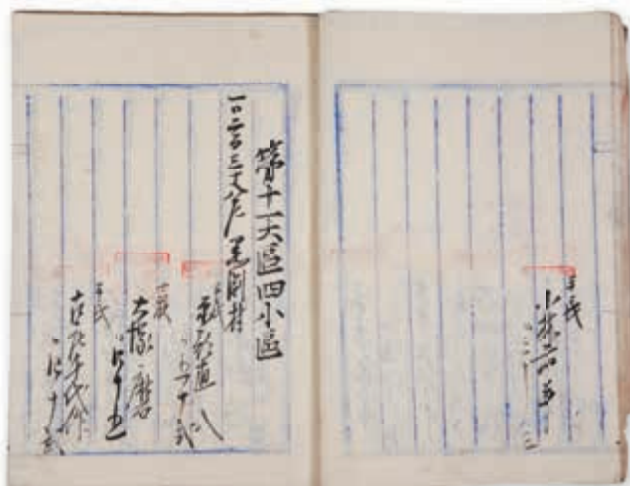
手永制の廃止により、惣庄屋・会所役人・村庄屋たちは一斉に免職された。しかし、こうしたリストラの一方、新設された地域行政の吏員の多くには、地方役人経験者が採用された。近世の地域行政を支えてきた彼らの能力や技術は、明治政府が打ち出す学制・徴兵令・地租改正などの近代化事業を地域社会で実行するにあたり、不可欠な存在であった。

他方、明治維新を経て、地方レベルで議会制が導入されると、地方役人経験者には議員に選出される者たちも数多くあらわれる。明治九年、熊本県では全国に先駆けて、「臨時県民会」という県議会を開設する。県議員は小区会・大区会・県会の複式選挙で選出され、その選挙権・被選挙権は、財産制限によらず二五〜六五歳の男性すべてに認められた（今村直樹「明治九年熊本県民会考」『熊本歴史科学研究会会報』五五、二〇〇四年）。玉名郡南関手永などの惣庄屋を務めた木下助之（木下初太郎の養子）、前述した徳富一敬や、矢島忠左衛門の子である直方（源助）も県会議員に選出された。

本史料は、阿蘇郡（当時は熊本県第十一大区）における小区会議員四七八人の名簿。四小区の黒瀬村（現阿蘇郡小国町）選出の大塚磨は、幕末期に北里手永の役人や村庄屋を務めた経験をもち、維新後も地元の戸長などを務めた。明治九年の選挙でも、最終的に県会議員まで選出されている。彼は、明治初年の地域社会において教育や産業の振興に尽力した人物であった。



御横目間取書②



民会議員名簿 第十一大区  
（栗林家文書95、熊本大学附属図書館所蔵）



第35回 熊本大学附属図書館貴重資料展

解説目録

# 熊本藩に生まれた近代

—手永・惣庄屋制と地域行政—

今村直樹 編著

令和元年 11月刊 熊本大学附属図書館

本目録の無断転載・複製を禁ずる